



Title	韓国語に入った日本語に関する歴史的研究
Author(s)	李, 漢燮
Citation	大阪大学, 1986, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/29079
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【2】

氏名・(本籍)	李	漢	燮
学位の種類	学	術	博
学位記番号	第	7403	号
学位授与の日付	昭和	61年	7月30日
学位授与の要件	文学研究科国文学専攻		
	学位規則第5条第1項該当		
学位論文題目	韓国語に入った日本語に関する歴史的研究		
論文審査委員	(主査) 教授 宮地 裕		
	(副査) 教授 徳川 宗賢 助教授 前田 富祺		

論文内容の要旨

本論文は、19世紀末以後、日本語の語彙がいつごろどのように韓国語に取り入れられていったかを明らかにしたものである。

日本語が韓国語に入った史的事実については、両言語の交流史上重要な出来事として、日韓両国の研究においても、注目されてきた。しかし、どのような語がどのような過程を経ていつごろ韓国語に入り、どのように使われてきたかということを具体的に調査・研究したものはほとんどなかった。本論文は、日本と韓国との政治的・文化的関係に配慮しつつ、日本・韓国・中国のそれぞれの時期の資料を調査して、それぞれの時期における日本語から韓国語への流入の実態を明らかにしたものである。

本論文は、第一章「はじめに」、第二章「韓国語に日本語が入った経緯」、第三章「韓国語に入った日本語」、第四章「おわりに」の四章からなる。

第一章「はじめに」では、これまでの研究が、日本語が韓国語に入ったという事実の指摘にとどまるとともに、特に日本から入った漢語・洋語の重要性を見逃しがちであったことを述べる。また、このような研究は韓国語語彙史研究のために必要であるばかりでなく、日本語の歴史の問題としても重要であると主張している。

第二章「韓国語に日本語が入った経緯」では、日本語が韓国語に多く入るようになったことには、韓国が日本を通じて西洋の文化を受け入れることのあったことにもよるが、韓国に日本語を使わせようとした植民地統治時代の日本の言語政策によるところが大きいことを明らかにしている。

第三章「韓国語に入った日本語」は、本論文の中心をなす部分で、(一)「調査の方法」、(二)「語種別の考察」、(三)「今後の問題」の三部からなる。(一)「調査の方法」では、韓国語に入った日本語を1

和語、2漢語、3洋語、4混種語の四種に分けて考え、時代的には、韓国が日本に開港した時から日本の植民地統治が始まるまでを第一期（1876～1910）、日本の植民地統治の時期を第二期（1910～1945）、日本の植民地統治が終わってから現在までを第三期（1945年以降）と、三期に分けるべきだとし、更に、それぞれの時期の韓国語を知るために調査した36種の資料についての説明を加えている。

(二)「語種別の考察」(1)「和語」では、全時期を通じて1,068語が入っており、現在もそのうち154語が使われていることを明らかにしている。日本語の発音で受け入れた語は、1945年以後の国語醇化運動によってほとんどが使われなくなったのであるが、和語を韓国語の字音読みの形で受け入れたものは、かなりの部分がそのまま使われている。(2)「漢語」では、日本語の発音の形で一般語として受け入れたものは586語であるが、現在は、「餡飴」一語を除いて使われなくなったとしている。なお、この他に土木・建築関係、印刷関係などの専門分野の人々にのみ使われる位相語があり、これらは、現在も使われているものが多い。この他、韓国の字音読みの形で受け入れた語はかなり多いものと思われるが、これらは中国語から直接韓国語に入ったものとの見分けがつきにくい。ここでは、これまでの研究を参考にするとともに、中国・日本・韓国における資料を総合的に判断している。福沢諭吉『西洋事情』にならって韓国に西洋を紹介した啓蒙書『西洋見聞』には日本語から入ったものが289語あることを明らかにした。更に、現在、韓国で盛んに行われているサッカーなどの十種目のスポーツの用語にも320語が入っていることを明らかにしている。(3)「洋語」では、日本製の洋語をも合わせて全時期を通じて1,088語が使われていることを明らかにしている。ただ、日本語の発音の形で入った洋語で後に原音に近い形に直されたものが多いことが注目される。(4)「混種語」では、漢語と和語とが結合した語、洋語と和語とが結合した語、洋語と漢語とが結合した語など、合わせて537語が韓国語に入っていることを明らかにしている。これらのうち、和語と漢語とが結合した語のほとんどは韓国語に字音読みの形で受け入れられているため韓国においては漢字語（日本語の漢語に当たる）として意識されてきたとしている。

(三)「今後の問題」では、以上の研究を踏まえて、今後更に日本語の発音の形で入った語は使われなくなっていくだろうが、韓国の字音読みの形で入った語はこれからも使われ続けていくものが多いであろうと推定している。なお、日本を通じて受け入れた洋語は今後も韓国語風に発音を変えて使われていくだろうとしている。

第四章「おわりに」では、本研究によって明らかになったことをまとめ、日本と韓国との政治的・文化的な関係によって、多くの日本語が韓国語に入っていったことを述べ、その調査・研究の重要性を説いている。また、今後の研究に残された課題をまとめている。

なお、巻末には、日本・中国・韓国における参考文献を挙げている。

以上合わせて400字詰原稿用紙で415枚である。

論文の審査結果の要旨

本論文は、19世紀末以降の日本語から韓国語に入った語彙の消長を36種の資料を精査して実証的・体

系統的にまとめた最初の論文として評価される。

日本語の発音の形で韓国語に入った語は比較的判断しやすいので、これまでにも指摘はされていたのであるが、それとてもいつごろどのように韓国語に入ったか、現在ではどうなっているかについての検討はあまり行われてこなかった。本論文において、これを実証的・総合的に調査・研究し、見通しをつけた点も高く評価される。

日本で使われている漢字表記を韓国語の字音読みに直して受け入れているものは、中国から直接に韓国語に入った語との見分けがつきにくく、研究が遅れていた。これらの語には、日本で作られたものばかりでなく、中国で使われた語が日本に入り日本的な用法となって韓国語に受け入れられたものもあることも研究を困難にしている。論者は、中国の資料の調査、日本の資料の調査を進めるとともに、これまでの漢語の研究を参照して、韓国で使われている語が日本から入ったものであることを確かめており、本論文でもっとも注目されるところである。ただし、漢語で韓国語の字音読みにされた語については、『西洋見聞』で使われているものとスポーツ用語として使われているものとに限定した調査となっている。この時期の日本における漢語・中国で新しく作られた語の研究はまだ始められたばかりであるから、資料・分野を限定して調査を進めたというのも止むをえないところであろう。

同様な問題は洋語においても認められる。日本で作られた洋語は調査によって判断できるとしても、直接韓国に入った洋語との見分けはつきにくい。これらについては更に一語一語の検討が必要であろう。

混種語では、和語と漢語との混種語が韓国語の字音読みで受け入れられたものの調査が注目される。このようなものが多くあることはこれまであまり指摘されていなかった事実であり、総合的・網羅的に調査を進めた論者の発見である。

なお、本研究では、韓国語の資料として主に辞書・啓蒙書・小説・雑誌などを正在用いており、この他、翻訳書・教科書・新聞などジャンルを異にする資料の調査も必要である。また、文献資料ばかりでなく、現在実際に話されている韓国語の調査も必要である。更に、韓国における一語一語の語史的な研究を深める必要もある。その点では、なお補うべきところも多いのである。

今後に残された課題はあるとしても、以上のように、本論文は、韓国語に入った日本語に関する歴史的事実の研究に、一つの見通しをつけ、今後の発展にも大きく寄与するものと認められるのである。本論文は論者の研究者としての資質・能力をよく示すものであり、学術博士（課程）の学位申請論文として、十分価値あるものと認定する。